

難波西鶴と

海の道

【78】

森田 雅也

前回は西鶴の地誌「一目玉鉾」元禄2（1689）年刊と芭蕉の紀行文『奥の細道』の関係について、東北の「忍ぶ指の石」の項の表現の違いについて述べました。「海の道」からは脱線ですが、西鶴の「一目玉鉾」とは、彼ならでの面白く視点で描かれた地誌です。

その「一目玉鉾」巻四には、「あんでいや遠四千百四十里、は遠四千百十里」という記事があります。「あんでいや」とは「インディア」のことです。つまり、「インド」を指しています。

「い」は、「ア」の

ことだ。 「ア」は「日

本国語大辞典」によれば、

「東インド共和国西岸の州。

主都はパンジム（バナシ）。

1510年以来ポルトガルの

植民地となり、東洋貿易

の拠点として繁栄。196

1年インドに接収された。

イエズス会のアジア伝道の

中心地でザビエルの墓がある」という地です。

江戸時代は、オランダか

らもたらされたインド織物

そのものを「ア織」「ア

ア」と呼び、「臥曲」と記

しました。いすれにしても、

空港からインドのデリーまで空路3427kmと云われます。約5500kmと云うところでしょうか。

日本とインドが海路でどのくらいの距離で結ばれているか存じませんが、西鶴が「インド」と「ゴア」で海里数を変えて表記しているのには注目できます。もしかすると、西鶴の知識の中には、インドに、東海岸経済圏と西海岸経済圏があることまで分かっていたのではないのでしょうか。事実、西鶴の頃、西海岸のポルトガル領「ゴア」では廃れはじめ、東海岸の「ボンダイシェリ」付近ではフランスとイギリスの東インド会社がしのぎを削り始めているのです。

それにしても西鶴は、なぜ「ゴア」をわざわざ取り上げたのでしょうか。というのも西鶴以外の作品で「ゴア」を取り上げた用例が見い出せないからです。

「一目玉鉾」

「ゴア」は、先にもあげたように日本にキリスト教を初めて伝えたことで有名な「フランシスコ・ザビエル」が拠点とした場所です。彼はマラッカにおいて、日本人アンジローと出会ったことによって東洋伝道思い立つのですが、その宣教師ゆかりの「ゴア」を西鶴が重要視していたことには驚かされます。

私事ながら、今夏連載の間を縫って、イタリアに行ってきました。ローマではイエズス会の本拠地ジェズ教会を訪ねました。教会には「聖フランシスコ・ザビエル礼拝堂」があり、ザビエルの右腕が保存されています。見ることはかまいませんでしたが、案外西鶴はザビエルのことも知っていたのではないかと思いをめぐらした次第。可能性があるかもしれませんね。

（関西学院大学文学部文学言語学科教授）

「インド」「ゴア」使い分けた？